

英米文化学会（監修）、
上野和子、大東俊一、塚田英博、丹羽正子（編著）、
『ヴィクトリア朝文化の諸相』
東京：彩流社、2014、3200円、264頁

小田夕香理

本書は、英米文化学会のヴィクトリア朝文化を研究する分科会のメンバーによる、十章から成る研究書である。題名に「諸相」とあるにふさわしく、その内容は実に多彩であり、ヴィクトリア朝の文学や美学から、ヴィクトリア女王の人生、一般的にはあまり知られていないと思われる柔術ブームまで、この時代の文化を広範にカバーしている。日頃からヴィクトリア朝文化を研究する者であっても、本書を読み終える頃には、これまで目に留めることのなかったヴィクトリア朝の一側面を発見することになるであろう。以下に、各章の内容を紹介する。

第一章「子どもの純粋性と残虐性——ディケンズ『大いなる遺産』とハーディ『日陰者ジュード』を比較して」において、丹羽正子氏は、ディケンズとハーディとは、同じヴィクトリア朝の作家ではあっても、生きた時期や、家族背景、教育環境が異なることを説明する。その上で、子どもの本性は善であるというルソーの考えを支持し、九人の子の父親であるディケンズが描く子どもには「ロマン性、純粋性」(34)が見られるのに対し、子どもに触れ合う機会が少なかったハーディが描く子どもは、「因襲に組み込まれゴシック的な残酷性を持った存在であり、希望をもち得ない余計者」であることが指摘される。しかし、ディケンズもハーディも「時代に翻弄され教育より労働を強いられ物質文明の犠牲となっている子供たち」を描いており、二人が「母性愛を受けずに育ち、自らのアイデンティティに自信が持てない不安感に苛まれる子どもに対して大いなるシンパシーをこめて」子どもたちを描いていることに変わりはないと著者は結論する。現代日本の子どもによる殺傷事件についてのヒントが『日陰者ジュード』ある可能性を、著者が示唆しているのも興味深い。

第二章「カルー台地に吹く赤い風——シュライナー『アフリカ農場物語』にみる進歩、女性、そして帝国」では、上野和子氏が、十九世紀末から帝国主義論争

で活躍した南アフリカのケイプ植民地出身のフェミニスト、オリーヴ・シュライナーと、彼女の小説『アフリカ農場物語』を取り上げる。著者によれば、禁欲的な母親のもとに育ち、幼少時に妹を亡くしてキリスト教の信仰を離れたシュライナーにとって、「家庭は聖なる避難所ではなく殉教と裏切りの場」(45-46)であり、彼女は「ジェンダー役割への反抗と罪意識、自立と罰というゆがんだ論理で成長した」(46)という。また、シュライナーには外国に侵入した部外者としての疎外感もあり、家庭にもアフリカにも居場所のない彼女は、アフリカの自然に不可知論的世界観を見出したという。『アフリカ農場物語』には、神の不在を経験する少年ウォルドーと、女性への抑圧の問題を抱える少女リンダルの二人の主人公がおり、彼らがそれぞれにシュライナーの思想を表していることも詳述される。上野氏は、植民地や女性の問題と闘ったシュライナー自身が「南アフリカのカルー台地から吹く赤い風」(60)であったと結び、彼女の情熱と勇敢さを示している。

次に、門野泉氏による、第三章の「劇場人ヘンリー・アーヴィング——ライシウム劇場アクター・マネジャーとしての業績」について述べる。著者によれば、アーヴィングは、ライシウム劇場で俳優として成功した後、劇場のアクター・マネジャーとしても活躍し、『ハムレット』などのシェイクスピア作品の斬新な解釈や、『マクベス』などの、当時はあまり上演されなかったシェイクスピア劇の復活、メロドラマの質の向上、文学作品の舞台化、革新的な新作の発表に功績を残したという。また、国内外の巡業によってより多くの観客を確保し、社会における演劇や俳優の地位の向上に努めたアーヴィングは、一八九五年に、俳優として初めてナイトの位を授与されたという。アーヴィングには、その名声とは裏腹に、別居中の妻がありながら相手役の女優と関係をもつという私生活があったが、著者は「公私に矛盾を抱えた生活の生み出す不安や葛藤が、舞台の演技に深みと奥行きを与える要素となったかもしれない」(84)と述べ、当時の社会規範に反する彼の秘密の生活もまた、彼の成功の要因であった可能性を指摘する。彼の業績を再検証することは、「単にヴィクトリア朝演劇の研究のみならず英国演劇を理解し、将来の展望を考えるうえで必要不可欠」(89)であると門野氏は締めくくる。アーヴィングの再評価による英国演劇のさらなる発展に、期待が高まる。

次に紹介するのは、川口淑子氏による、第四章「オスカー・ワイルドの『まじめが肝心』から劇場を覗く——新参者と馴染みの上客が並ぶ空間」である。川口

氏によると、十九世紀末の劇場には、客席によってチケットの価格に差はあったものの、上流から中産階級以下に至る多様な観客が訪れたという。著者は、平均的な客層を想定して書かれたヘンリー・ジェイムズの『ガイ・ドンヴィル』が失敗した一方で、ワイルドが『まじめが肝心』で異なる階層の観客を楽しませることができた理由として、様々な登場人物や場面の採用と、男女の役割や社会的な力関係の逆転などのアイロニーを挙げる。『まじめが肝心』では、「アイデンティティの探究と、それ以上にその変更が、物語の中心」(98)である。また、「何もしないということは、この作品では、趣味の良い贅沢」(103)であって、「倦怠や停止を意味するのではなく、逆に一つの立場に固執することを拒否し、自由であることを意味している」(103)のである。川口氏は、『まじめが肝心』が、アイロニーや入れ替わるアイデンティティによって、階級よりも個人を重視する社会主義的平等というワイルド自身の理想を表すものでもあることを指摘し、この章を結んでいる。商業的な戦略とワイルド自身の理想とが合わさって『まじめが肝心』が創作されたことが示される、興味深い論考である。

第五章「女性の攻撃性と殺人——ヴィクトリア朝フィクションとマデリン・スミス事件」において、閑田朋子氏は、「家庭の天使」であるべき淑女が犯す殺人事件を分析する。まず取り上げられるのは、恋人殺しの容疑で裁判にかけられ、証拠不十分とされたマデリン・スミスの事件である。著者は、彼女を「無実のヒロイン」(114)とする見方もあれば「悪魔の化身」(114)とする見方もあったこと、また、彼女が有罪か無罪かをめぐる賭けが存在したほどに、彼女が善と悪のどちらにもなりうる「曖昧な存在」(115)でもあったことは、淑女には殺人は犯しえないという社会通念の揺らぎを指すと分析する。そして、当時の文学作品に見られる淑女の殺人についても例証し、「大きく分ければ階級社会の上層と下層、および家長制的な建前と女性の本音という上層と下層において、淑女の殺人については別々の言説があり、さらに同じ階層の中でも個々人の考え方によってそれぞれが混在していた」(128)と指摘する。著者によれば、一八四〇年代から労働者階級や下層中産階級が認識しはじめていた淑女の攻撃性は、次第に中産階級上層でも認識されるようになるが、中産階級の富裕層は、七〇年代になっても、依然として、自らの地位を上流階級や労働者階級と区別する手段として、「家庭の天使」という理想の女性像を固守したという。淑女の殺人をめぐる明らかにされる中

産階級の理想と現実の乖離が巧みに検証されており、興味が尽きない。

次に紹介するのは、松原典子氏による、第六章「愛に生きたヴィクトリア——私人、そして「家庭の天使」」である。著者によれば、ヴィクトリアの夫となったアルバートは、公の場でも家長としての立場を崩さず、彼に啓発されて妻の立場を重視したヴィクトリアは、当時の理想の女性である「家庭の天使」を体現する存在となったという。また、ヴィクトリアは女性解放運動には保守的であったというが、彼女が夫の死後も「家庭の天使」の理想を放棄できなかったことがその原因であるという著者の分析は興味深い。ヴィクトリアはシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』の読者であったが、アルバートとの結婚生活で形成された社会観をもつ彼女が「女性の自立や主人公の叫びに共感したとは言いがたい」(152) というのである。著者は、「彼女の真の幸福は『家庭の天使』として家父長制のもとで愛を享受した時」(155) であったと述べ、この章を結んでいる。ヴィクトリアの「家庭の天使」としての側面が浮き彫りにされる一章である。

第七章「田園化された身体——前世紀転換期イギリスのフィジカル・カルチャー」において、赤瀬理徳氏は、イギリス人の身体の構築を、イギリスの表象である「田園」を取り上げて論じる。まず、ヴィクトリア時代の半ばには都市の空気汚染が取り沙汰されたことが説明され、都市の劣悪な環境とは対照的に、田園が憧憬の対象となり、イギリスの象徴として捉えられるようになったこと、そして「メリー・イングランド」という理想の過去が確立されたことが解説される。著者によれば、労働者や兵士になるべき都市部の労働者階級の人々の身体弱体化の解決策として、田園と子どもを結びつけた教育が取り入れられたという。そして、二十世紀初頭には、子どもたちの農業への興味を喚起するものとして、また、歴史的遺産である田園、つまりイギリスという国の連続性を守ろうという愛国心を培うものとして、自然教育が重視されたという。それに伴い、農村の民衆文化であるフォークダンスが見直され、都市の子どもたちの健全な肉体、精神、愛国心を養うために採用されたことも紹介されている。著者は「前世紀転換期のイギリスにおける「田園」を主軸とした^{フィジカル・カルチャー}身体をめぐる文化は、文字どおり帝国のための^{フィジカル・カルチャー}身体の培養をも意味した」(179) と述べ、この章を締めくくる。イギリス人が田園を通して生まれ、帝国へと結びつけられる過程を明らかにする、刺激的な論考である。

次に、岡田桂氏による、第八章「世紀末イギリスの柔術ブーム——社会ダーウィニズム、身体文化メディアの隆盛と帝國的な身体」を紹介する。著者によれば、二十世紀初頭のイギリスにおいて、日本の柔術は、タニ・ユキオらによる巡業によって、東洋の秘儀ではなく格闘技として知られるようになり、イギリス人の身体文化への関心の高まりとともに浸透したという。そして、ボーア戦争での苦戦の一因として、都市の生活環境の悪化による、兵士として戦うべき労働者階級の人々の身体の虚弱化が指摘されると、身体文化は、彼らの身体の劣性を提示する社会ダーウィニズムの優生学が生み出した危機感と相まって、身体問題の解決手段として広まったという。柔術は「特にその実践という面から考えれば、「東洋の未知なる技」という興味から出発しつつも、身体文化という大きな流れのなかで理解・消化され、「帝国主義的身体」をつくり上げるという、その運動のなかに組み込まれていった」(204)のである。著者は、身体文化と柔術が、男性の肉体に審美的な価値を与えるものとして、現在もイギリスに残っていると解説する。柔術ブームの変遷をたどると同時に、文化がどのように生まれ、普及し、変化するのかを再考させられる一章でもある。

塚田英博氏は、第九章「ラスキンの美学論——生活、喜び、そして芸術」において、まず、ラスキンの芸術論に「原則（規則）・形式・比率・調和・合理・精神」(215)を重んじる古典主義傾向があることを指摘する。そして、ラスキンが「鑑賞者の心に、自然物の忠実な概念を帰納的に導くこと」(218)を重視し、「美である自然と古典主義」(220)が彼の芸術観を形成すると説明する。ラスキンは「自然の法則が持つ、最も本質的な真実の美」(224)を鑑賞者の心に導くことが画家の目的であると考え、また、「個々の自然をじっくりみることで真理が見えてくる」(225)という原理を見出していた。彼の古典主義同様、彼の自然観にも古代ギリシアの思想の影響が見られるが、ラスキンは単純に古代ギリシアの思想を模倣したのではなく、「生活とともにある喜び」(228)をもとにそれを発展させ、「生活と共にある喜びのための芸術」(228)という彼の美学論を導き出したのだと、著者は分析する。生活を芸術の概念に組み入れるには限界があり、このことがラスキンを社会改革へと向かわせた可能性もあるが、彼が芸術批評において功績を残し、彼の美学論が芸術を大衆に開放することに大きく貢献したことに変わりはないことを述べて、著者はこの章を結んでいる。ラスキンの美術論における「生活」の重

要性が明快な論理で示される、有益な論考である。

第十章の「アルフレッド・テニスンと進化論——科学の知見と宗教的信条とのせめぎ合い」では、大東俊一氏が、ヴィクトリア朝に目覚ましく発展した自然科学、特に進化論に照らし、テニスンの詩を考察する。まず、テニスンの『王女』や、『一八三二詩集』の「イノーニー」に、科学技術や科学的な思考が盛り込まれていることが例証され、テニスンが「科学的知見に基づく自然描写によって、一層の詩情を醸成すること」(243)を追求したことが解説される。また、著者は、テニスンの『イン・メモリアム』が、ダーウィンの『種の起源』をはじめとする進化論の主要著作よりも先に発表されたことを説明した上で、そのなかに、当時注目されていた化石の記録が喚起する、人類もいつか化石として地層に埋もれるかもしれないという恐怖とともに、「感性的な快楽を抑圧し、自らの内にある野獣的な性質を止滅させて、人間という境涯のまま、人間でない境涯に上昇する」(252)という「進化」を願う心情が表されていると指摘する。テニスンが十九世紀の詩人として科学的な知見を取り入れ、進歩史観の影響のなかで「進化」の概念のもとに人類の新境地を追い求めたことが、整然と証明される一章である。

ヴィクトリア朝という、複雑な要素が絡み合った時代の全てを一冊の本で網羅するのは難しい。だが、執筆者がそれぞれの視点からヴィクトリア朝の文化にアプローチする本書は、それらが織りなすこの時代の特徴を包括的に浮かび上がらせている。本書が、日本ギヤスケル協会の会員にとって、ヴィクトリア朝文化についての見識を深めることのできる有益な一冊であることは間違いない。

(富山大学専任講師)